

Pick
Up
Artist



水永牧子

みずなが まきこ

チェンバロの音色に魅せられて

さくらプラザで2回目となるチェンバロ・リサイタル。本公演では、その高い技術と表現力を持ち、チェンバリストとして精力的に活躍する水永牧子さんが登場します。チェンバロへの真摯な思いや、曲に対する深い探究心、そして今回のプログラムまでさまざまなお話をうかがいました。

—チェンバロとの出会いはどのようなものだったのでしょうか？

チェンバロとの出会いは15歳頃になります。それまでずっとピアノは習っていたのですが、古い音楽にどんどん惹かれて……その中でも特にバッハが好きだということに気がついたのです。それで「私はバッハに専念していきたい」ということを先生や親に伝えたと、チェンバロを勧められました。そこで初めて知ったのですが、バッハはピアノのためではなく、チェンバロのために曲を書いていました。そして、チェンバロ教室（故・鍋島元子主宰）の門を叩いて習い始めました。

—最初にチェンバロに触れた時はいかがでしたか？

やっぱり……感動的でしたね。ピアノで弾いていたフランス組曲をチェンバロで弾いたのですが、ピアノの響きと全く違いました。もちろん楽器の大きさも違いますし、鍵盤は軽いし「これはなんだろう」と思いました。ただ



「私はピアノよりもチェンバロの音色の方が好き」ということは、それはもう、最初から明らかでした。

—初めから惹かれるものがあったのですね。

そうですね。チェンバロに出会う前、私は音量の大きな楽器に惹かれるのではなく、音量は小さくても自分の心にずっと入ってくるような、内向的な楽器が好きだということを感じていたので、チェンバロはぴったりでした。

—そこがチェンバロの魅力でもありますね。

そう思います。音量はそんなに大きくないですけれども、典雅な響きがあったり、さわやかだったり、それから心にしみてくるような……そんな音色も魅力的だと思っています。バロック音楽も好きだということはわかっていたので、その時代の鍵盤楽器もやはり自分は好きだということに気がつきました。

—バロック音楽とは、どんな音楽なのでしょう？

バロック音楽は舞曲が多かったり、情景描写をした音楽が多かったり、その後の時代とは描いている音楽が違います。後に生まれた、例えばロマン派や古典派の音楽は、自分の感情や内面を吐露するような音楽がだんだんと増えてきますが、やはり私にはバロック音楽が合っているのだと思います。国にもよりますが、例えばフランスのバロック音楽だと人物や動物の描写をしていたりします。それからルネッサンスでは、例えば「バグパイプとドローン〜『戦い』より」（W.バード/本公演でも演奏予定）はある意味、戦争の情景描写です。太鼓をどんどん叩いているような音が激しく鳴っていたり……そういった情景をチェンバロで表現しています。

—なるほど。水永さんがお持ちのチェンバロは、どのようにして選ばれたのですか？

私のチェンバロはオーダーメイドで、完成まで3年ほどかかりました。まずは自分の演奏を製作家に直接聴いていただいて、それから「こういう楽器を作ってほしい」という要望を伝えて作ってもらった楽器です。チェンバロは製作家が1台1台手作業で作りますから、好みによってももちろん変わってきます。どんなタイプのチェンバロを選ぶか、それから何色に仕上げたいか、どんな装飾をつけるのか、脚は猫脚にするのか……当時の貴族がひとつの装飾家具としても楽しんでいたのも、王宮趣味も反映されています。

—最初にご自分のチェンバロを弾いた時は、どんな感触でしたか？

「ああ、すばらしい楽器だな」と思いました。ドイツに留学していた音楽大学にK.ヒル(Keith Hill)が作ったチェンバロがあったので、ずっとレッスンで使っていました。実はK.ヒルの弟が私のチェンバロの先生で、いかにこの楽器がすばらしいかということも先生が教えてくれて、それで是非とも同じ方に製作をお願いしたいと思っていました。

—それから10年間、弾き続けてきた中で変化はありましたか？

ありましたね。最初に来た時は、楽器が暴れている感じがしました。「この楽器はどうしたら収拾がつくのだろう」という……音が散っているような感じがあったのですが、弾き込んでいくうちに、だん



だんと思いが通じるようになってきました。少し弾けば反応してくれる、そういう楽器に仕上がってました。やはり楽器というのは気持ちに通じるものですね。

—水永さんとチェンバロが呼応しているのですね。

はい。ある意味、弦楽器として木の鳴りが良くなっています。例えばヴァイオリンも年数が経つほどいい音がしてきますよね。それと似ていて、チェンバロも木の鳴りが良くなってきます。チェンバロは爪で弦をはじいて音が出ているのですが、その爪を最初はある程度、強くしていましたが、だんだんと軽い爪でも充分鳴るようになってきました。軽い爪で楽器がたくさん鳴ってくれるということは、演奏者の労力が少なくなってくるので、楽器に気持ちを委ねられる部分が大きくなってきます。ただ、やはり楽器を鳴らすテクニックは必要です。いかに楽器から音を引き出してあげられるかという……。強く弾いたからといって大きな音がでるという楽器ではないので、だからこそ力を出すのではなく楽器の力を最大限に引き出し、いい音を鳴らしたいという思いは常にあります。

—楽器との信頼関係があるからこそ、為せる事ですね。ところで最近、水永さんはチェンバロ教室を始められたそうですが、演奏家として弾いている時と教える時とはどんな違いがありますか？

自分が演奏する時は、やはり自分自身と向き合っている部分が多いですし、作曲家の意図しているものをひたすら追求することが多いですけれども、教える段階になったらそれを一度かみ砕いて生

Pick
Up
Artist



水永牧子



徒さんと一緒に考える時間にしてみたり、あるいはその生徒さんが持っているものを引き出してあげるようにしています。それぞれの個性ももちろんありますし、皆さんこだわりの曲を持って練習していて、私もとても面白いです。

—お互いに良い影響があるんですね。先日、発売されたCDのテーマが「親子で聴けるチェンバロ」と伺いましたが、お子さんとの時間の中ではどんな影響がありましたか？

私はもう本当にチェンバロが大好きでこの20年間ずっと弾いてきましたが、自分の好きなものだけを追求してきました。チェンバロの楽しみのひとつでもあるのですが、知られざる作曲家を掘り起こして、新しい、いい曲を発見して、世の中に出していくということがあります。けれど、そればかりやっているとチェンバロの音楽はちょっと難しいという印象を与えてしまうと思います。そういうことを自分は好きだからやってきたのですが、子どもを産んでからは、少し意識が変わりました。子どもに「うちのお母さんは難しいことやっているなあ」と思われたくないと(笑)。「お母さんは楽しいことをやっている」と思って欲

しいというのもあって、クラシック音楽の楽しさをわかりやすく伝えたいと考えようになりました。ある意味、原点に返ることができました。

—お子さんと一緒に音楽を楽しんでいらっしゃるんですね。

そうですね。子どもはチェンバロの前に座って一緒に弾いたりすると、好きな曲は体を揺すったりとか、弾く真似をして、「きらきら星」は手の振り付けをつけて踊っています(笑)。こうやって音楽に慣れ親しんでいくという光景を毎日、目の当たりにしています。そうして、自分の子どもを通して、お客様に演奏する時もいい曲ということが伝わりやすい曲を選んで演奏したいと思っています。

—今回のプログラムについてはいかがでしょう？

ひとつのポイントはわかりやすいクラシックをお届けしたいと思っています。例えば『カヴァティーナ』はギターでよく演奏される曲です。映画「ディアハンター」の主題曲にもなっている有名な曲で、これも本当にいい曲です。リョベートの3つの小品(『聖母の御子、羊飼いの娘、糸を紡ぐ娘』)はカタルニア民謡をギター用に

編曲したものです。チェンバロの曲というのは基本的に、宮廷で演奏されていた貴族のための音楽なので気取っていたり、舞曲は形式が決まっていたりするのですが、ギターの曲はもう少し庶民的な音楽で親しみやすいので、それを取り入れてみたいと思っています。モーツァルト『きらきら星変奏曲』は、小さなお子さんにも知っている有名な曲なのでぜひ演奏したいです。これはピアノで演奏することが多いですが、チェンバロでも十分演奏できますし、モーツァルト自身もチェンバロで演奏していたと思うのでは非ともこれは弾きたいです。最初はかわいらしい「きらきら星」なのですが、だんだん難しくなっていくって最後は激しく変化するという技巧的な大曲です。また、スウェーリンクとバードはルネッサンスの曲です。16世紀のオランダとイギリスの作曲家なのですが、まだ調性(※)が確立していない時代の音楽なので、少し不思議な感じがありますね。

—とてもバラエティー豊かな選曲ですね。

今回はいろいろな曲をお届けしたいなと思っています。チェンバロってかわいい音が出るんですよ。それは是非とも聞いてほしいです。軽やかだし、情熱的な時もあるし、カッコいい音も出せるし、柔らかな音も出せるし。見た目はピアノに似ているのに全然違う。初めて聞くという方も多いと思うので、チェンバロをもっと知ってほしいと思っています。きつと背景などを知れば知るほど、みなさん身近に感じてくださるのではないのでしょうか。

—それでは最後に戸塚の皆様にメッセージをお願いします。

チェンバロはヨーロッパでピアノが出てくる前に、大変流行していた鍵盤楽器です。音量は大きくないですが、典雅な音がかたり情熱的な音が出せたり、かわいらしい音が出せたり、とても魅力的な楽器です。ルネッサンスの小品から始まって、ギターの名曲、それからバッハの美しい旋律を集めたプログラムで演奏しますので、是非みなさん聞きにいらして下さい。お会いできるのを楽しみにしています。

—本日は貴重なお話、ありがとうございました。

(聞き手:佐々木愛理)

※ 調性：17世紀頃に確立した西洋近代音楽の長・短二種の調からなる和声的な調体系。



水永 牧子 (チェンバロ)
Makiko MIZUNAGA, Cembalo

桐朋学園大学古楽器科卒業。フライブルク音楽大学大学院を最優秀の成績にて修了、同校では初めてドイツ国家チェンバロ・ソリストディプロマを取得。留学中はグバイドゥリーナのプロジェクに参加や、M.アンドレと共演するなど、欧州各地で演奏。99年モントリオール国際チェンバロコンクール第2位、M.ゴネヴィルの現代作品にて最優秀賞も受賞。01年東京リサイタル・デビュー以降、日本フィルと共演や東京オペラシティ「B→C」、北九州国際音楽祭に出演するなどソリストとして活躍中。CDは02年「D.スカラルラッティ・ソナタ集」(アントレ)、03年「夢見る雨」、06年「イングリッシュ・ガーデン」(ビクター)、11年「イングランド麗し〜吟遊詩人の歌と変奏曲」(浜松市楽器博物館)をリリース。また14年5月に新CD「チェンバロおもちゃ箱」(日本アコースティックレコーズ)をリリース。古楽アンサンブル「ラ・フォンテーヌ」のメンバーとして第11回古楽コンクール(山梨)最高位、00年ブルージュ国際古楽コンクール第2位・聴衆賞受賞。4枚のCDを発売、ロンドンSBC音楽祭、ヨーク古楽祭等に出演。また磯絵里子(ヴァイオリン)、水谷川優子(チェロ)とチェンバロ三重奏「アクア・トリニティ」を07年に結成。10年にCD「アクア・トリニティ/水の薫り」をリリース(ソニー・ミュージックダイレクト)。01年度文化庁在外研修員。チェンバロを故・鍋島元子、R.ヒル、M.ペーリンガーに師事。

◆オフィシャルブログ
<http://makikos-diary.blogspot.jp/>

午後の名曲散歩 Vol.2～チェンバロで紡ぐ物語～ 10/22 (水) 14:00開演 (13:30開場) 全席指定:2,000円

好評発売中!

Vol.1～Vol.3
セット券(5,000円)
も発売中!
(※9/17まで)

※曲目曲順は予告なく変更となる場合がございます。



©Wataru Nishida

